



国際的に活躍する専修人を紹介する「Globali専修国際人(グローバル「専」ション)」。今回は香港で人気のかき氷店「SHARI SHARI Kakigori House 氷屋」のオーナー、武慎吾さん(平20文)に登場いただく。

「SHARI SHARI Kakigori House 氷屋」オーナー
武 慎吾さん(平20文)
SHINGO TAKE



デザート文化が盛んな香港ですが、まだ日本のかき氷の店はなかった。ものを通して日本のことを紹介したい、そしてオンリーワン、ナンバーワンを目指したいと、「SHARI SHARI」を開業しました。私自身もかき氷が好きだったこともあります。温暖な香港でも冬は寒い日もありますが、ありがたいことにたくさんの方に支持されています。日本人オーナーの店ということで来てくれるお客さんも多いです。

—幼いころからの夢が実現したと言えますね。
それ以上です。マニラで展開することになったのは、ビジネスパートナーが直接私にアプローチしてくれてきたことがきっかけでした。「SHARI SHARI」を通して、さまざまな国の人と知り合うことができている。お客さんはもちろん、フードプロガーやビジネスのお話もあり、世界が広がっていると感じています。その中でも大学で学んだ文化比較が生きています。今の目標としては、かき氷を通じて、日本の文化をアジアで広げていきたい。それは私にしかできない使命だと思っています。

専大生へのメッセージ

What goes around comes around

自業自得とも訳されますが、私はもっと広い意味に捉えていて、いいことをすれば自分に返ってくる、と信じて行動するようにしています。特に香港のように狭い場所にたくさんの方がいる大都市で暮らしていると、ギスギスした気持ちを感じることもありますが、その時に自分がどうあるべきか、落ち着いて、寛大な心で人や物事に接することを、自分に課しています。自分を顧みながら行動すること、若いうちに考えてみてほしいと思います。

かき氷を通じて日本の文化をアジアへ

—フワフワの和風テイストのかき氷が香港で人気です。
約6坪の店からスタートし、店の規模を拡大しながら今は香港に2店舗、マニラに1店舗構えています。日本から氷を取り寄せ、トッピングも抹茶や北海道の食材など日本の味にこだわって提供しています。

—ご自身が海外に興味を覚えたのはいつからですか。
幼い頃から外国の地図を眺めるのが好きで、英会話を習っていました。高校卒業時に行ったニューヨークで大いに刺激を受け、いつかここで暮らしてみたいと思うようになりました。

大学では英語英米文学科の上村妙子ゼミで文化比較について学びました。3年次の時に1年間休学して、米サンディエゴに留学。多くの人と出会い、さまざまな文化を学びました。留学をきっかけに、もっと国際交流したいと思うようになりました。また、海外のものを日本に取り入れるのではなく、日本の文化を海外に紹介したいと考えるようになりました。

—大学生生活も変わりましたか。

英語が本当に上達したと実感できるようになったのは留学の後からです。アメリカの友達との毎日のチャットでライティングが向上しましたし、専大に来ていた留学生との交流イベントに積極的に参加したり、外国の教員の補助員も務めたりして、身近なところでも英語を使う場面は作ることができると気付きました。授業一つ一つへの意識も変わって、単位さえ取ればいいのかではなく、興味のあるものを積極的に学ぼうと、専門外のスペイン語や日本文学、地理なども履修しました。

—どのような経緯で香港にお店を開くようになったのでしょうか。

卒業後、航空系の会社に就職しました。本当にいい会社でしたが、直接海外とつながる仕事ではなく、違和感を感じていたところ、親族の香港での仕事を手伝うことになりました。香港は英語だけでも暮らせますし、オフィシャルな書類は英語が優先されます。実は私は今でも中国語ができないのですが、ここでならやれると決意し、2015年に独立しました。

第21回専大ベンチャービジネスコンテストのプレゼンテーション大会が12月3日、神田キャンパスで開かれ、最優秀賞にあたる鳳賞に原口友樹さん(経営4)が選ばれた。今回は30組が応募し、書類審査と事前プレゼンテーションを通過した10組が本選に臨んだ。出場者は、本学OBの起業家や教員など14人の審査員を前に渾身のビジネスプレゼン



原口さんの熱のこもったプレゼン

原口さんの熱のこもったプレゼン。審査員から「素晴らしい」と喜んだ。このほか、栄養バランスやカロリーなどの項目で飲食店を検索できるサービスを考案した山田祐樹さん(経営3)のチームが育友会会長特別賞を受賞した。

鳳賞に原口さん

ベンチャービジネスコンテスト

は、学生選手とチームのスカウトをつなぐプラットフォーム「ROSTER」を提案した。選手が自身のパフォーマンスデータなどを投稿し、その情報をもとに高校や大学

サッカー交流戦が開催されたスタジアム



だった。それでも選手たちは懸命に戦い、1-0で有終の美を飾り、応援席が歓喜に包まれた。新型コロナウイルス感染症の影響で、交流戦が3年ぶりに開催されたこともあるだろうが、日本とは異なる会場の雰囲気にも驚かされた。チームを応援していても周囲の人とそこまで一体感を感じたことはなかった。距離感が近すぎるようにも思ったが、韓国人は「우리(私たち)」という言葉

応援で生まれる熱い一体感

この授業では、韓国のスポーツ文化の背景を学び、10月にサッカー交流戦が開催されたスタジアム。応援で生まれる熱い一体感。母校の音楽に合わせて、学生応援が踊り、観戦している学生やOBたちも、それに合わせて声を出したり、知らない人とも隣同士の人と肩を組んだり盛り上がりを見せ、選手以外もチームの一員のような一体感が生まれていた。私は以前、日本でスポーツ観戦をしたことがあるが、同じチ

「スポーツ文化の国際比較」韓国・現地実習に参加して

寄稿

文学部ジャーナリズム学科4年次 山賀萌江

15チームが成果発表

課題解決型インターンシップ

地域の企業や団体から提示された課題に学生が主体となって取り組み、解決策を提案する課題解決型インターンシップの成果発表会が12月、ウエブで公開された。本学独自のプログラムで17回目となる今年度は、15のプロジェクトに約100人が参加した。

読売ジャイアンツの2軍公式戦の集客企画の立案・実施に取り組んだチームは、SDGsの目標「アロマとZ世代をつなぐ」をコンセプトに新ブランド「No.Z(ノーズ)」を立ち上げた。アロマペンなど3商品を開発し、専大購買会やECサイトでの販売にこぎ着



個々を尊重するために 包括的に性を理解する

話題の映画「あのこと」は、中絶が違法だった1960年代のフランスで、望まぬ妊娠をした大学生が、自分の身体なのに「選択肢」もなく、相手の男性もその女性の心身の健康に無関心という中、孤独と闘いながら解決策を模索するという実話に基づいている。現在の日本にも通じるさまざまな論点があるが、ここでは性に関する科学的で包括的な知識を身につけることの重要性について触れておきたい。皆さんは、小中高でどんな性教育を受けてきたのだろうか？ 私が公立の小中高で学んだ性教育のうち覚えていたのは、小学校高学年の女子だけが集められて、月経(生理)に関する映画を見たことぐらいである。同じ時間に体育をしていた男子たちは、女子限定の授業に興味津々で、その後も生理などを揶揄していた。

他方、私の娘が通う小学校では、「包括的性教育」を視野に入れ、1年生から各学年、男女一緒に性教育を受けている。なお、包括的性教育の目的は「自らの健康・幸福・尊厳への気づき、尊厳の上に成り立つ社会的・性的関係の構築、個々人の選択が自己や他者に与える影響への気づき、生涯を通して自らの権利を守ることの理解と実行を具体化するための知識や態度等を獲得させること」とされている。大学生生活に目を転じると、異性の問題をタブー視してはいないだろうか？ 自分自身の心と身体を大切にしたい。互いを尊重するためにも、性に関しての理解を深めることは重要だろう。私も小4の娘が性教育で得ている知識にキャッチアップすべく、学び続けたいと思う。(キャンパス・ハラスメント対策室員 杉橋やよい)